

## 論文

# 一般好嫌色と被服着用好嫌色との相違性に関する研究 —日・米・メキシコにおける大学生の好嫌色の交叉文化的検討—

## A study of Difference between General Color Preference and Clothing Color Choice —Cross-Cultural Studies on Color Preference of Students in the U.S.A., Mexico and Japan—

押山 八重子      Yaeko OSHIYAMA      Notre Dame Women's College  
家本 修          Osamu IEMOTO      Osaka University of Economics

### Abstract

The behavior of wearing clothes is selected by the color preference of clothing and designs. Also, it is influenced by culture and society.

It is a fact that the clothing of preferred color is worn very often but people do not necessary wear clothes of preferred color.

The purpose of this study is to investigate the difference and the coincidence between wearing preferred color clothing and not wearing it, under the assumption that the difference increases by the influence of society.

As a result, it is found that there is a difference between the preferred color wear and the non preferred color wear in each country, but the difference of Japanese boy students and American girl students are small. This means that there is low social consciousness when they wear their clothing.

On the other hand, it was clarified concerning the Mexican boy group and the girl group that there was a difference in the relation of the preferred color and color of clothing worn.

In addition, to clarify the background of the influence, cluster analysis was done. From the data analyzed, a possibility was detected that the behavioral characteristic of clothing and self-concept is a factor involved in selecting the color of clothing worn.

The formation of the difference of the preferred color and color of clothing worn is not decided by the influence of culture and society. The life environment which includes the individual personal environment plays a role.

### 要 旨

被服の着用行動は、被服の色彩嗜好やデザインの嗜好によって選択され、行動自体が社会的文化的影響を受けていることが明らかになっている。しかし、着用者は必ずしも嗜好色を着用するとは限らないし、また、嗜好色を着用しようとするのも事実である。この着用、非着用の差異と一致に着目し、社会的な影響が大きいほど両者に関きがあると考え、調査・実験をおこなった。その結果、国別に双方の選択色の差異が認められるが、日本の男子学生とアメリカの女子学生には差異が小さく、被服の着用際に際しての社会的意識が少ないと見られる。一方、メキシコ男子群と女子群は被服の着用好嫌色と一般好嫌色との一致に関きがあることが明らかになった。さらに影響の背景を明確化するためにクラスター分析をおこなった。その結果、自己概念と被服行動特性が着用色を選定している可能性を見出した。ここから、被服の着用好嫌色と一般好嫌色の異同の形成は、社会的文化的関係によって一義的に決まるものではなく、個人の対人的環境を含む生活環境がその役割を果たしていると考えられる。

## 1. 緒言

被服の着用や選択行動には、気候といった生理的・物理的側面、規範や慣習、流行といった社会的側面、デザインや色彩の嗜好性といった個人的側面が要素として考えられる。特に被服の色彩の嗜好性は、着用の選択行動に大きな影響をもたらすといわれている。さらに、色彩との関係からみても、幼児においては女色、男色といった性的役割と連動した表現が見られるし、夏向き、春向きといった季節感との関係も存在する。同色であっても伝統・文化、あるいは、環境によって COLOR-IMAGERY は異なり、同じ青色系であっても、単に寒色ではなく暖色と評価する地域も存在する。一方、カラーイメージ調査（日本色彩研究所）（文献1）では、集団データからのイメージデータベース化に成功しているが、個人行動では、嗜好色は各人とも同一な反応を示すものでもない。また、メディアの発達により都市部や農村部の区別なしに、さらには国の区別なしに同一な情報が日々各家庭に送り込まれている。これらの中にあっても、やはり各人は被服の同一な嗜好色を示すわけでもない。この原因は、根強く残る伝統文化によるものであろうか、個人の気質や性格といった個人的要因によるものであろうか。生活・環境といった要因であらうか。個人的要因であるならば、嗜好色の形成はいかなるプロセスをもちうるものであろうか。明らかになっている点は、まだ極めて少ないといえる。

被服の色彩から、一般的色彩嗜好に課題を拡大すると地域文化と色彩嗜好の関係から、多数の地域比較研究がおこなわれている。日本に比べ韓国では白や黒（無彩色）の嗜好が多いとする斎藤美穂の韓国と日本の比較<sup>2)</sup>（1990）、方文泰の中国に比べ日本の方が色幅が多いとする中国と日本の比較研究<sup>3)</sup>（1992）、芳村玲子らの日米比較研究<sup>4)</sup>（1988）が見られる。これらの多くは、文化・伝統による色彩嗜好傾向の比較をおこない差異を明らかにしてきた。しかし、この差も徐々に縮まりつつあるともいわれ、情報量の拡大と国際的な均一化によって個人の嗜好性が優位になりつつあるのか、伝達内容による影響なのかは、まだ明らかではない。さらに色彩感情の研究では、2方向からアプローチされてきた。1つは色彩に関する感情的アプローチに関する研究であり、もう一方では、色彩の共感覚等をおつかった意味的アプローチに関する研究である。前者は、千々岩英彰の色彩の嗜好性による研究<sup>5)</sup>（1995）によって示される。後者は、稲蔭正彦

による音との共感覚による実験<sup>6)</sup>（1987）など散見される。しかし、嗜好性に関しては、その形成プロセスを明らかにしたものではなく、この課題はメカニズムとしては重要な問題にも関わらず未解決のまま残されている。

そこで、本研究では、被服の嗜好色の形成過程を明らかにすることを課題に設定し、まず、伝統・文化によって色彩に嗜好色の異なりが出現するのか、個々の気質や性格によって差異が認められるかを明らかにすることを目的とした。本稿の課題からは、3つの条件が考えられる。まず第一に、色彩嗜好は個人の気質・性格によるものであるとするならば、国際的な情報に接する機会の多い場合は、文化の差異は僅少化し、近似的な色彩嗜好が生成する。第二に、伝統・文化等の社会的文化的側面は、その地域の人々にとって保守的な心理的行動に影響が認められる。心理的行動に差異が地域間に認められると、伝統・文化は心理的行動に影響を及ぼして色彩嗜好の生成過程要因であり得る可能性がある。この場合、色彩嗜好傾向と心理的行動との関係は、地域によって異なると考えられる。第三には、地理的環境など、物理的生理的要因が色彩嗜好に影響を与えているものと考えられるとするものである。これらの要因が複合的に発生するものであると考えられるが、どの要因が有効な差異を生じさせるかについて、本稿では、まず被服の色彩嗜好の地域的文化的側面からの調査結果について報告する。

## 2. 調査・実験方法

### 2.1. 調査項目と色票の選定

文化的社会的要因も含まれると考えられる被服の色彩嗜好と心理的行動要因を明らかにするため、研究目的にあった自己概念のリッカートタイプ27項目<sup>7)</sup>（1971）、被服に対する着用、嗜好傾向、興味を明らかにするために被服に対する態度の測定にリッカートタイプ23項目<sup>8)</sup>（1982）を求めた。各項目は、7段階評定尺度（自己概念）・5段階評定尺度（被服態度）を用いた。また、色彩嗜好選択用色票については、PCCS（日本色研配色体系）から65色の色紙を貼付して構成されたカラーチャートを用いた。

#### 2.1.1. 測定項目と翻訳の手続き

自己概念の27項目と被服態度の23項目は、英訳をおこない1991年度に日本（日本語版）、アメリカ（英語版）、ドイツ（英語版）で現地での調査測定に使用し

表1 被服色彩色の調査試料

No	トーン記号	色名	(JIS 記号)	No	トーン記号	色名	(JIS 記号)
1	p 2	R	4.0R 8.5/3.5	34	d 20	V	9.0PB 4.0/7.5
2	p 4	rO	10.0R 8.5/3.5	35	d 22	P	6.0P 4.0/7.5
3	p 6	yO	8.0YR 9.0/3	36	d 24	RP	6.0RP 4.0/7.5
4	p 8	Y	5.0Y 9.0/3	37	V 2	R	4.0R 4.5/14
5	p 10	YG	4.0GY 9.0/3	38	V 4	rO	10.0R 5.5/14
6	p 12	G	4.0G 8.5/2	39	V 6	yO	8.0YR 7.0/14
7	p 14	BG	5.0BG 8.5/2	40	V 8	Y	5.0Y 8.0/13.5
8	p 16	gB	5.0B 8.0/2.5	41	V 10	YG	4.0GY 7.0/12
9	p 18	B	3.0PB 8.0/3.5	42	V 12	G	4.0G 5.5/10.5
10	p 20	V	9.0PB 8.0/3.5	43	V 14	BG	5.0BG 4.5/10
11	p 22	P	6.0p 8.0/3.5	44	V 16	gB	5.0B 4.0/11
12	p 24	RP	6.0rp 8.0/3.5	45	V 18	B	3.0PB 3.5/13
13	ltg 2	R	4.0R 6.5/3	46	V 20	V	9.0PB 3.5/13
14	ltg 4	rO	10.0R 6.5/3	47	V 22	P	6.0P 3.5/12.5
15	ltg 6	yO	8.0YR 7.0/2.5	48	V 24	RP	6.0RP 4.0/13.5
16	ltg 8	Y	5.0Y 7.0/2.5	49	dk 2	R	4.0R 2.4/6
17	ltg 10	YG	4.0GY 7.0/2.5	50	dk 4	rO	10.0R 3.0/6
18	ltg 12	G	4.0G 6.5/2	51	dk 6	yO	8.0YR 3.5/6
19	ltg 14	BG	5.0BG 6.5/2	52	dk 8	Y	5.0Y 4.0/5.5
20	ltg 16	gB	5.0B 6.5/2	53	dk 10	YG	4.0GY 3.5/5
21	ltg 18	B	3.0PB 6.0/3	54	dk 12	G	4.0G 3.0/5
22	ltg 20	V	9.0PB 6.0/3	55	dk 14	BG	5.0BG 2.4/5
23	ltg 22	P	6.0P 6.0/3	56	dk 16	gB	5.0B 2.0/5.5
24	ltg 24	RP	6.0RP 6.0/3	57	dk 18	B	3.0PB 1.8/6
25	d 2	R	4.0R 5.0/7.5	58	dk 20	V	9.0PB 1.8/6
26	d 4	rO	10.0R 5.5/2.5	59	dk 22	P	6.0P 1.8/6
27	d 6	yO	8.0YR 6.0/7.5	60	dk 24	RP	6.0RP 2.0/6
28	d 8	Y	5.0Y 6.5/6.5	61	W		N9.5
29	d 10	YG	4.0GY 6.0/6.5	62	ltGY		N7.5
30	d 12	G	4.0G 5.5/6	63	mGY		N5.5
31	d 14	BG	5.0BG 5.0/6	64	dkGY		N3.5
32	d 16	gB	5.0B 4.5/6.5	65	BK		N1.0
33	d 18	B	3.0PB 4.0/7.5				

表2 被験者群

(単位:人)

性別	国名	人数	調査大学名
女子学生	日本	170	ノートルダム女子大学 大阪経済大学
	メキシコ	114	Universidad Autonoma de Guadalajara JALISCO, MEXICO.
	米国	101	Notre Dame College of Maryland Baltimore, MARYLAND, U.S.A.
男子学生	メキシコ	99	Universidad Autonoma de Guadalajara JALISCO, MEXICO.
	日本	193	大阪経済大学

た結果、有効な差異が認められ、文化的内容との適合性を示した項目である<sup>9)</sup>(1993), <sup>10)</sup>(1984)。また、各項目の翻訳は、日本語版を作成後、複数のネイティブスピーカーによる意味の検定と英訳をおこない、他者によって日本語に翻訳し意図が一致することを確認したものである。この原版を元にスペイン語による翻訳を同様の手続きによっておこなった。

自己概念の項目は、因子分析の結果、〈明朗積極性〉〈理知性〉〈外向性〉〈情緒性〉〈内的安定性〉(累積寄与率57%)の各因子が認められた項目であり、被服態

度の項目で、因子分析(主因子法、バリマックス回転)をおこなうと〈个性的おしゃれ型〉〈おしゃれエンジョイ型〉〈慎み深さ型〉〈同調型〉〈品質関心型〉〈経済関心型〉〈着心地関心型〉(累積寄与率55.5%)の結果が得られ、これらの項目を調査項目として採用した。

### 2.1.2. 色彩嗜好測定票の諸元

被服の嗜好色の色選択に使用した色票は表1(マンセル表色値によるJIS系統色名(JIS Z 8102))に示す。この色票は有彩色60色と無彩色5色で構成される。1色片は2.0cm×2.5cmであり、全パネルサイズは、26.2cm×38.0cmである。

## 2.2. 調査実験地域と被

### 験者の選定

集団的同一性を近似させるために大学生を調査・実験対象に選択した。また学生群の調査原点を日本におき、各種メディアの情報伝達量と伝達内容が近似してきていると考えられる米国を選定し、大学生で米国と教育的差異が認め難く、生活伝統的慣習が認められると考えられるメキシコを選定した。

被験者は、合計667名で平均年齢19.6才である(表2)。

### 2.3. 調査期間と調査法

調査は、1994年7月上旬から9月上旬にかけて、日本・メキシコ・米国において、選定各大学生を対象に集合調査法による質問紙調査と色票選定実験を実施した。

### 2.4. 嗜好色の選定実験法

各被験者は、1部づつカラーチャートを水平に置き、最も好きな色(嗜好色)と被服として最も着たい色

表3 嗜好・嫌悪色と着用嗜好・嫌悪色の類似距離係数(国・性別)

	日本 女子大生	アメリカ 女子大生	メキシコ 女子大生	日本 男子大生	メキシコ 男子大生	
嗜好色と被服着用嗜好色	0.75	0.72	0.69	0.65	0.73	P<0.05
嫌悪色と被服着用嫌悪色	0.70	0.66	0.77	0.67	0.81	P<0.01

(上段、F:TEST, P&lt;0.05)(上段、F:TEST, P&lt;0.01)(注2)

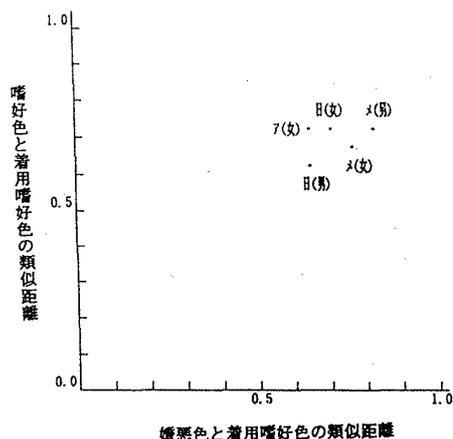


図1 国別一般嗜好色と着用嗜好色の類似距離

(被服嗜好色), 最も嫌いな色(嫌悪色)と最も着たくない色(被服嫌悪色)をそれぞれ1位から3位まで3色ずつ選択した。使用した場所は、普通教室で昼間、直射光を避けた自然採光である。なお、被服の嗜好・嫌悪色の選定には、季節を配慮しないことを質問紙に明記した。

### 3. 結果と分析

#### 3.1. 類似距離による検討

選択色の3位までの出現順位で、嗜好色と着用嗜好色、嫌悪色と着用嫌悪色の比較をおこない、同一順位の場合は0.を一順位異なる場合を.5, それ以外を1.として得点を与え、集計後件数で割り平均距離係数とした。(注1)

各国別・性別による嗜好色・被服着用嗜好色、嫌悪色・被服着用嫌悪色の関係を表3, 図1に示す。

この結果から嗜好性では、日本の男子学生の係数が低く、他の調査群と比較し一般的色彩嗜好色と被服の着用色との関係が類似している。メキシコ男子学生は嗜好色と着用嗜好色が異なり、嫌悪色の関係では類似傾向がより明らかに認められる。メキシコ女子学生群でも嫌悪色にその傾向が見られる。

被服の着用では、直接的間接的に社会的批判を受ける可能性があり、他者の視線を意識することから、社会的規範に規定される<sup>11)</sup>(1974)とされ、この意味から

も嗜好色の着用が阻害される結果となり、類似距離の開きになると考えられる。好嫌双方の場合では、否定的な意味合いの側面の方が強く出現すると見られることから、嫌悪色の場合から考察する。被服着用嫌悪色

と一般的嫌悪色との類似度の開きは、保守的・伝統的影響を残しているものと考えられる。これは、生理的・心理的に発生する嫌悪色と社会的伝統的に規定される着用嫌悪色とは必ずしも一致しないから、開きが大きいほど影響度が大きいと考えられる。さらに、この場合で、その集団に一定の着用嫌悪色が出現した場合は、強い規範意識が維持されている可能性がある。一方、嗜好色と着用嗜好色の一致は、着用者にとっての自由度を表しているとも考えられ、個性的な選択が許されているものである。

また、この調査3カ国の各被験者集団では、多メディアに接する自由さがあり、多くの情報に接することが可能であると考えられる。このことより色の選択には、文化や慣習性からの影響を受けるものと見られる。

これらの結果から、メキシコの女子大生は色彩選択の可能性と自由度はあるものの文化的背景によって被服の色彩選択は自己規制されているものと考えられる。しかし、日本の女子大生では嗜好色・着用嗜好色の類似度が低いことから社会的関係を意識して着用色の選択をおこなっていることが伺える。さらに、米国の女子大生は対社会的認識と自己主張の表現としての被服を意識しているが、他の集団に比較して嫌悪色の類似性の強さは、個々の問題として嫌悪色を認識していることが考えられる。また、男子大学生では相対的にメキシコの大学生の方が日本に比べ類似距離係数が高く、日本より保守的・伝統的背景に被服の着用色が影響を受けている事が伺える。

#### 3.2. 類似距離のクラスター分析結果

好嫌の類似距離係数をもとにクラスター分析をおこなった。その結果から、図2で示すような5クラスターが得られた。このクラスターごとの平均類似係数は表4に示す。

第1クラスターは、好嫌双方の尺度とも嗜好色・着用嗜好色と嫌悪色・着用嫌悪色との間に類似度が低い場合であり、逆に第5クラスターは、類似性の高い集

表4 色彩嗜好と被服着用色の選択類似距離係数(クラスター別)

ク ラ ス タ	第1クラスター	第2クラスター	第3クラスター	第4クラスター	第5クラスター
嗜好色と被服嗜好色	0.88	0.54	0.82	0.36	0.07
嫌悪色と被服嫌悪色	0.90	0.56	0.16	0.92	0.04

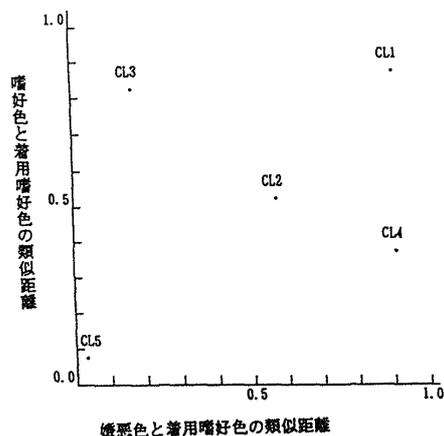
(上段、F: TEST,  $P < 0.05$ ) (上段、F: TEST,  $P < 0.05$ )

図2 クラスター別一般嗜好色と着用嗜好色の類似距離

団である。第2クラスターは安定した状態を示し、第3クラスターは嗜好色に類似度が低く嫌悪色に類似度が高い結果となった。第4クラスターでは、嗜好色と着用嗜好色に類似度が高く、嫌悪色では低い結果となった。

このことから、第5クラスターの構成員は、色選択でも自由な着用をおこない自らの生活態度や心理的内的側面が表出していることと見られる。それに比べ第1クラスターは、社会的規範や対社会的感覚に左右された集団と見ることができる。第3クラスターでは、心理的生理的内的側面から嫌悪色の選択をおこなっている可能性が示唆される。着用嗜好色は、実際に着用する可能性を示している色彩であることより、嗜好色と着用嗜好色の異なりは、社会的文化的背景に依存している可能性が考えられる。この社会的文化的背景は、流行やTPOなどとともコーディネイトなどの着用に関する要因も加わっていることも否定できない。しかし、自由な選択の可能性を確保しながらも社会的協調行動やコミュニケーションを重視しているとも考えられ、伝統的基盤に規制されている集団ではないと見られる。第4クラスターは、文化的伝統的背景を持ちながらも、色彩や被服の選択行動にとっては、積極的な自由性が確保されている集団であるとみられる。むしろ文化伝統的側面に対する否定的行動を求めているように見える集団でもありと考えられる。

### 3.3. 類似距離係数クラスターと態度項目からの検討

第1クラスターでは、「どちらかというところ落ち着いた地味な服装が好きである」(3.8: 平均得点)「衣服

を選ぶときには流行中のものでも気安さを重視する」(3.8)「衣服の形や色を上手に組み合わせ、変化を付けて着る方である」(3.7)「服装のセンスはよいと思う」(3.6)などに肯定的な考えを持っている。一方、「メンズものを着ている人はだらしなく見える」(1.9)「襟ぐりを深くカットした服を着ている人を見ると、自分がきまり悪く感じる」(1.9)「新しい流行の服を周囲の人よりも先に着たい方である」(2.3)に否定的意見を持っているが、第5クラスターのメンズ・襟ぐりの同項目(1.7)よりは、その否定度合いは低いとみられる。新しい流行の項目では、第5クラスターは平均値2.5であり、第5クラスターの方が同様に肯定的である。(第1クラスター・第5クラスター間,  $T: TEST, P < 0.05$ )。第3クラスター・第4クラスターの比較からも、「どちらかというところ華やかな服装が好きである」(3CL: 2.7, 4CL: 3.1,  $T: TEST, P < 0.05$ )、「超ミニは品がないと思う」(3CL: 2.9, 4CL: 3.2,  $T: TEST, P < 0.05$ )「色やデザインの気に入ったものでも肌触りの悪い衣服は買わない」(3CL: 3.4, 4CL: 2.9,  $T: TEST, P < 0.05$ )に差異が見られた。これらから、第3クラスターは第4クラスターに比べ被服行動としては比較的保守的な行動を示していると思われる。

これらの結果から、第1クラスターは第5クラスターに比べ保守的であり、社会的適合性を意識した着用をしているものと考えられる。このことは、社会的文化的背景から影響を受けているものであり、さらに各グループ別構成比(各国構成比)に有意差が見られないことから着用者自身の態度が重要な役割を果たしているものと見られる。さらに第3、第4クラスターからも嫌悪色・着用嫌悪色間の開きに保守的傾向が出現していることから、一般的好悪色と被服着用好悪色との類似・相違の関係は、社会的文化的背景を表出しているものと考えられる。

### 4. まとめ

一般好悪色と被服着用好悪色との類似・相違関係を

求めるために、比較的保守的文化背景を持つものとみられるメキシコと比較的自由な環境をもつとみられる日本、個人的な自由があるとみられるアメリカで、情報伝達が比較的同等に享受できると見られる大学生を対象に一般的好嫌色と被服着用時の好嫌色を調査し、その関係を求め、類似度の高い集団と低い集団、嫌悪色に類似度を見いだせる集団、嗜好色に類似度が認められる集団、双方の明解な区別が付かない集団に分け検討した。

その結果から、各集団では国別構成比に有意差が認められず国別特異性が認められなかった。しかし、生活態度や被服行動には差異が出現し、個人的な態度が嫌悪色と着用嫌悪色の相違性を表出しているものと考えられる。

このことは、調査対象3国では、現在の社会において情報の均一的な伝達によって、着用により自由な被服行動が存在することと着用者個人の態度（パーソナリティ）によって対社会的意識が強いのか、保守的意識が先行するか否かによって着用嗜好色を選定していることが明らかになったと考えられる。よって、被服の着用好嫌色と一般的嗜好色の異同の形成過程は、社会文化的関係によって一義的に決定されるものではなく、パーソナリティとの関係で選定されると考えられることより、個人の持つ対人的環境を含む生活環境が大きな役割を果たしていると考えられる。

## 5. 注

1) 選択色の3位までの出現順位で、嗜好色と着用嗜好色、嫌悪色と着用嫌悪色の比較をおこない、それぞれ同一順位の場合は0.を一順位異なる場合を.5、それ以外を1.として得点を与え、各サンプルごとに集計し、順位集計数で割ったものが各個人値で、個人値を集計後件数で割り平均距離係数とした。

その結果、全く同じ順位で出現すると類似距離係数は0となり、異なると1になる。

2)  $t$ : testは、 $T$ 検定のこと。 $p < 0.05$ は、危険率5%未満を示す。

$f$ : testは、分散分析の $f$ 検定をおこなった。 $p < 0.01$ は、危険率1%未満を示す。

## 6. 参考文献

1) 日本色彩研究所色彩情報研究会：「第12回消費者の色彩嗜好調査報告書データ集」,(財)日本色彩研究所, 1992.

- 2) 齊藤美穂：「アジアにおける色彩嗜好の国際比較研究(1)―日韓比較・白嗜好に着目して―」, 日本色彩学会誌, No. 16, PP. 1-10, 1992.
- 3) 方文泰：「中・日女子学生の服装デザイン嗜好に関する比較研究」, PP. 89, 奈良女子大修士論文, 1992.
- 4) 芳村玲子, 齊藤美穂, 柳瀬徹夫：「色彩嗜好と使用色に関する日米比較―交叉文化的研究と因子分析を通じて―」, 日本色彩学会誌, Vol. 12, No. 1, PP. 68-69, 1988.
- 5) 千々岩英彰：「色彩感情の交叉文化的研究(2)―日・中・台・韓美術系学生の色彩感情の比較研究―」武蔵野美大研究紀要, No. 26, P. 45-54, 1995.
- 6) 稲蔭正彦：「色と音との共感覚の研究」, 日本色彩学会誌, Vol. 11, No. 1, PP. 58-59, 1987.
- 7) Creekmore, A. M.. "Method of Measuring Clothing Variables" Michigan University, East Lansing. PP. 45-52, 1971.
- 8) 藤原康晴：「女子大生の被服の関心度と自尊感情との関係」, 日本家政学会誌, Vol. 33, No. 10, PP. 189-196, 1982.
- 9) 押山八重子, 家本修：「衣服のファッション行動と自己概念の国際比較―日・米・欧の比較―」, ファッション学会誌, Vol. 3, No. 2, PP. 1-10, 1993.
- 10) 押山八重子, 家本修：「衣服のファッション行動と自己概念の国際比較―女子学生の自己概念別色彩嗜好―」, ファッション学会誌, Vol. 4, No. 1, PP. 21-29, 1994.
- 11) Bickman, L.. "Social Roles and Uniforms: Clothes Make The Pearson", Psychological Today, 7, No. 11, April, pp. 49-51, 1974.

(受付日：1996年11月13日)

著者紹介



おしやま や え こ  
押山八重子

昭和42年3月大阪市立大学大学院  
家政学研究科被服学専攻修士過程  
修了

ノートルダム女子大学助教授・家  
政学修士

日本色彩学会，日本家政学会，日  
本繊維機械学会，日本繊維製品消費学会，ファッション環境学会各会員



い ま も と お さ む  
家本 修

昭和61年3月大阪大学大学院工学  
研究科建築工学専攻後期博士過程  
修了

大阪経済大学経営情報学部教授・  
博士（工学）

日本色彩学会，日本家政学会，日  
本建築学会，日本心理学会，日本教育心理学会，日本  
繊維機械学会，日本教育工学会，教育システム情報学  
会，ファッション環境学会各会員